

「カッコウの卵」伝統

カトリックにおける女性聖職者問題

世界 12 億のカトリック信者を束ねる法王フランシスコが、本年 9 月下旬にキューバと米国への初訪問を終えた。法王は各地で熱烈な歓迎を受けたが、中絶や同性婚に関する目立った発言はなかった模様である。ではカトリックが従来抱えてきた「女性聖職者問題」（司祭職への女性の排除）についての人々の反応はどうだったのだろうか。ワシントンでは女性の聖職位への権利を認めるよう求める活動家 7 人が、市民的不服従を理由に逮捕された。逮捕者の中には、使徒マシュー大聖堂近くで「ダイ・イン」抗議を行った 4 人の女性宗教者も含まれていたという（「Democracy Now!」2015 年 9 月 24 日）。

米国のカトリック教会では 1960 年代以降、女性解放運動（第 2 波フェミニズム）や第 2 ヴァチカン公会議等の影響の下で、女性聖職者を認めるべきだという意見が次第に強くなっていく。その中で 1979 年に行われた法王ヨハネ・パウロ 2 世の訪米では、シカゴの歓迎集会にて「女性の司祭職は認められません」との期待外れの発言がなされた。ワシントンでは歓迎メッセージを読んだ一人のシスターが「現在、人類の半分（女性）が苦しみのなかにおります。今こそカトリック教会は女性に司祭職を与えるべきです」と述べ、続いて法王が話を始めると、50 人ほどの平服を着たシスターが法王に抗議のため無言で立ち上がったという。帰国後、法王は 1983 年に新教会法に署名するが、「女性も司祭の指名があれば、結婚、葬儀、教理問答等の業務を代行できる」という折衷案に留まった。次の法王ベネディクト 16 世も、女性聖職者問題に関しては、ヨハネ・パウロ 2 世の路線を受け継ぎ、今のフランシスコに至っている。では一体、聖職者への女性の排除はどのように理由づけされてきたのだろうか、そしてそれは本当にカトリックの「伝統」なのだろうか。

「カッコウの卵」の侵入

カトリック神学者のジョン・ワインガーズは、その著『女性なぜ司祭になれないのか』（2001 年）において、聖職者への女性の排除という「伝統」は、聖書にとって本来は異質な「カッコウの卵」伝統であると指摘している。「カッコウは自分の卵を他の鳥の巣にこっそりと産むだけではなく、狡猾にもその鳥の卵に似せて産み落とす。（中略）巣の主である鳥は見知らぬ鳥が自分の卵の傍らに産んでいったことなどを知る由もない。同じようにして初代教会においても女性への偏見が典型的に聖書的なものとしてキリスト教に偽装して紹介された」というのである。どのようにして「カッコウの卵」はキリスト教に偽装して忍び込んだのであろうか。そして「カッコウの親鳥」の正体とは何か。

まずワインガーズは、女性叙階が教会法で禁止され、そのため論拠が入念に考察された中世に焦点を当て、中世の神学者たちが提示する論拠を検証する。対象となるのは、トマス・アクイナス、ボナベントウラ、ドゥンス・スコトゥスら 5 人の神学者と、11 人の同時代の教会法学者を加えた計 16 名である。彼らの行った論争に関して、ワインガーズはその基本的論拠を以下の 5 つに絞り込み、一覧表で整理している。（1）男性とは異なり女性は神の似姿として創られていない。女性は男性に

従属する、（2）女性は教会内で教えるはならない、（3）女性はまだエバの罪の重荷を背負う、（4）キリストは 12 使徒の中に女性を一人も入れなかった（これはヴァチカン当局の現在の主要論理である）、（5）女性は完全な人間ではないのでキリストを代表することはできない。そして 5 つの論拠のそれぞれについて、それを支持するために引用される聖書の箇所が挙げられ、また最近のヴァチカン文書によるその論拠の実態も示されている（詳しくは同書の第 9 章から第 14 章を参照）。ここでは特によく引き合いに出される聖書の以下の箇所を含む論拠（2）について検討してみよう。

テモテへの手紙一（一テモテ） 2:12 「婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。」（新共同訳、以下同）

コリントの信徒への手紙一（一コリント） 14:34 「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることが許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従うものでありなさい。」 14:35 「何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥すべきことです。」

よく見ると、一テモテ 2:12 には「教会において」とは書かれていない。しかしこれに一コリント 14:34-35 が添付されるや場面はたちまち教会となり、たとえばトマス・アクイナスにおいては「一テモテ 2:12 に言われているように（女性が）叙階されることなどできない」と飛躍してしまうのである。「女性が教えることへの禁止」はその時の状況下で考えられねばならないと、ワインガーズは指摘している。テモテへの手紙は、パウロの弟子が彼の名前で、彼と同じ伝統に基づいて 100 年頃に小アジアまたはギリシャで書かれたとされるが、その主目的は当時多くの女性たちを魅了していたグノーシス派の教師が及ぼしている影響にいかに対抗するかであったという。グノーシス派において女性は「啓示の卓越したチャンネル」として称えられ、女性的な比喩による描写が神について自由に用いられていた。そのような偽りを説く異端の教師に女性たちが従うのを防ぐため、手紙は書かれたというわけである。「許す epitrepsein」という動詞の用法から見ても、「女性が教えることの禁止」は、当時の地域限定の一時的な禁止令だったと、ワインガーズは結論づける。すると一テモテ 2:12 の本意は「女性たちが真の教えを完全に把握するために、彼女たちが必要なことを学ぶまで、教えたり男の上に立ったりしてはならない」となる。一コリント 14:34～35 も一テモテ 2:12 と同じ原典に由来するとされ、グノーシス派対策という背景があった。一コリント 11:5 でパウロが教会で預言する女性について評価していることとの整合性を考えても、14:34～35 は女性への普遍的な禁止命令ではなかったことになる。

では、トマスに代表されるような飛躍した解釈の元となる「カッコウの親鳥」の正体とは何であろうか。この問題を次回で扱うことにしたい。

[参考文献]

ジョン・ワインガーズ『女性なぜ司祭になれないのか』（伊從直子訳）明石書店、2005 年。

生駒孝彰『神々のフェミニズム』荒地出版社、1994 年。